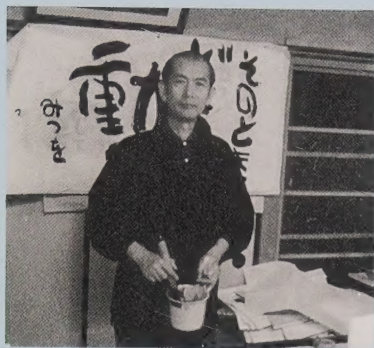


相田みつを いのちのことば

女向てたように
子は女向つ



相田みつを書
佐々木正美 著



独自の“書”と“詩”の世界に生きた 相田みつを

書家であり、詩人である、相田みつをの作品は、ほのぼのとした優しさと、慈愛に満ちた温かさ、そして邪心のない力強さに溢れています。その作品に触れれば、きっとあなたの渴いた心を癒してくれるでしょう。

相田みつを略歴

大正13(1924)年 栃木県足利市に生まれる。

昭和17(1942)年 旧制栃木県立足利中学校卒業。
同年、生涯の師となる曹洞宗高福寺の禅僧、武井哲応老師(故人)と出逢い、在家のまま師事し仏法を学ぶ。

昭和29(1954)年 足利市にて第一回個展を開催。
以後各地で「自分の言葉・自分の書」による作品展を開催する。

昭和59(1984)年 「にんげんだもの」出版。後にミリオンセラーとなる。

平成 3(1991)年 12月17日、足利市にて永眠。享年67歳。

平成 8(1996)年 9月、東京・銀座に「相田みつを美術館」を開設。

平成 9(1997)年 3月、NHK衛星第一放送「ことばに生かされて～相田みつを・人生の応援歌～」放映。同年5月、日本テレビ系「知ってるつもり～一生感動一生青春～」放映。

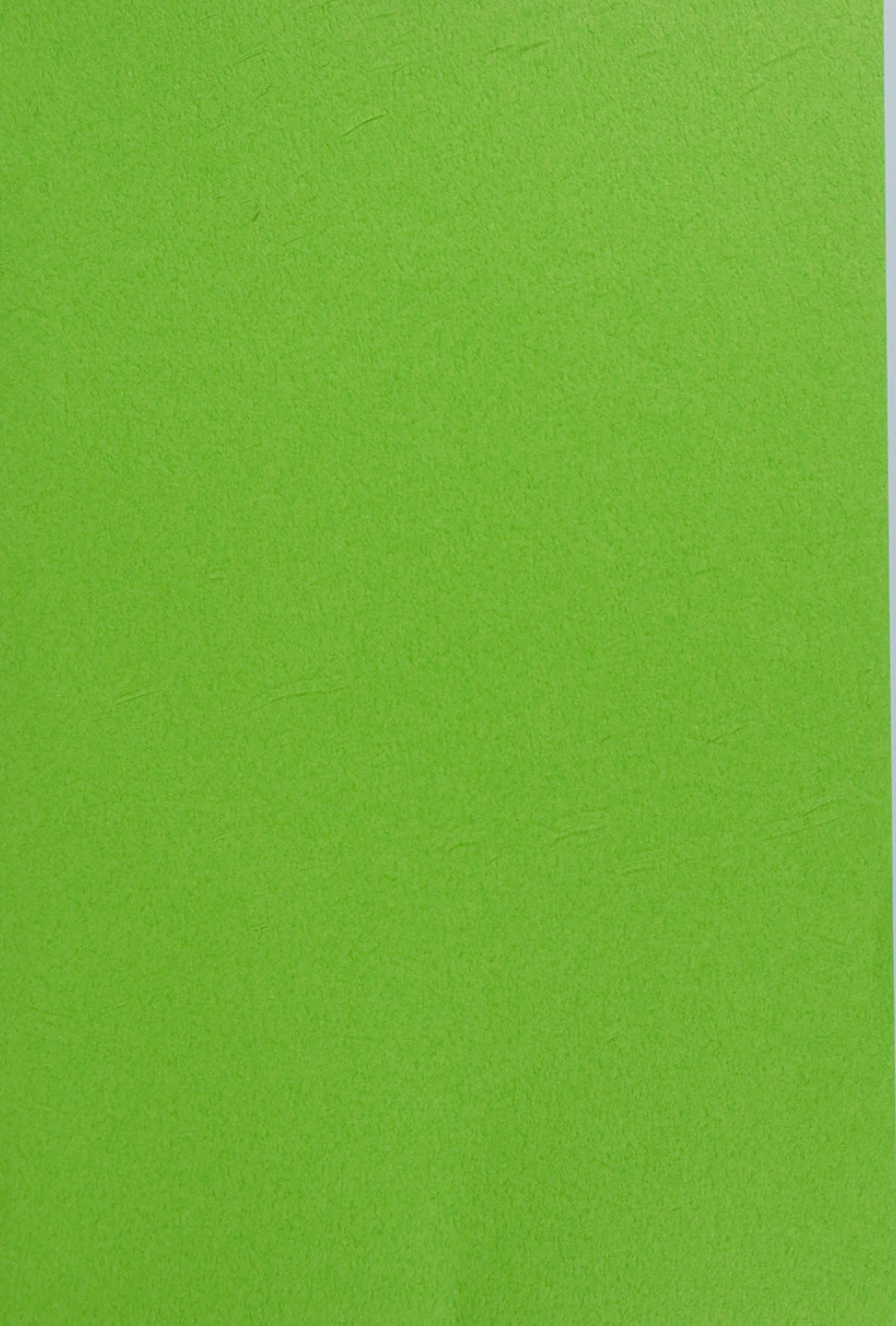
平成10(1998)年 毎日新聞社主催全国巡回展開催。

相田みつを いのちのことば

女育てたように
子はお母さん



相田みつを書
佐々木正美 著



「発刊にあたって」


佐々木正美先生は実践の人、先生を知る人はこんな印象を持つようです。

先生について作家の赤川次郎さんが、「穏やかな人柄と、柔和な笑顔、そして暖かい語り口」と書いています。『穏やかな人柄』について「現代の子どもたちの心に接してきた、膨大な裏付けがある」と作家の目は見抜いています。

事実先生は臨床現場の第一線にたえず身を置かれ、子どもや家族と接していますから、高い所からものを見るようなことはありませんし、気さくで、とくに小さな子どもと接しているときのお顔は、端にいるわたしたちを和ませてくれます。温和な人柄と本当は双子ではないかと思うほど休息のない実践者、これが先生だと思っています。

この稿で佐々木先生についての紹介と、本の出版経緯に触れたいと思いますので、先生が書かれたエッセーからあるエピソードを紹介します。

ある時、広島に向かう新幹線の車中で急病人が出たことを伝えるアナウンスがあつたそうで、乗客の中で



Digitized by the Internet Archive
in 2023 with funding from
Kahle/Austin Foundation

相田さんの詩は解釈がいろいろな詩だと思っています。実際、相田さんの書の前に付めば、[〃]いのち[〃]がゆさゆさと揺さぶられるわけですし、[〃]感動[〃]がじわじわと湧き上がってくるのですから。

「出逢いが人間を変えてゆく」と詩にあります。先の佐々木先生のエッセーの本のタイトルもまた『人生☆出会いと別れ』です。おふたりとも出逢うことの大切さを強調されているのも、何か引き合う力を感じます。この出逢いで詩はさらに美しい光彩を放つのか、はたまた詩の優しさと強さを確信した医師の言葉は人にとってそう大きな癒しを与えるのか。気にもなりますし、楽しみなどころでもあります。

本書の出版企画を提案したのは私ですが、テーマを「子育て」にした理由は、若いお母さん、そしてお父さんの子育ての援助になればとの思いによります。

育児不安やストレス、ノイローゼと子育てのマイナスの面ばかりをマスコミは強調しすぎてきたように思います。相田みつをさんの詩を通して、もっと育児を、さらには自分自身を輝かしいものとしてみられないだろうか。詩のように温かな目で人をみる^{こと}ができれば、きっと育児の楽しさも湧いてくるはずではないか。本書はこんな意図が出発点ですから、詩の解説本ではありません。むしろ従来にない子育ての本、と言った方が正しいのかもしれませんが。多忙な佐々木先生にはおおよそ半年間にわたる相田みつをさんの詩についての文章の推敲^{すいこう}をしていただきました。週に一度、横浜から倉敷の大学まで通われる新幹線の車中が好きな

もし医師の方がいたら至急連絡をしてほしいと言うのです。その要請に、精神科の医師であるけれども、と先生は申し出られ、他に適当な医師がいない場合に限って役に立ちたいと伝えられたのですが、どうやら適任者がいないようです。

患者の若い女性は激しい嘔吐、顔色蒼白、冷や汗があつて額も手足も冷たくなり、相当な頻脈状態でしたが、「ひかり」は名古屋まで停車駅がありません。先生は「ごたま」の次の停車駅で臨時停車を提案し、駅での救急車の待機も要請し、ご自身も三島駅で下車をされました。妊娠を疑われた先生の問いかけは正しかったようで、流産しないように産科のある病院を救急隊に伝え、先生は次の列車で目的地へ向かわれたということです。

あれから10年、新幹線で出会った女性夫婦との年賀状の交換がずっと続けられ、そのとき生まれた女の子の名前を夫婦は、「正美」と恩人と同じ名前にしたということです。

著者のまわりにはこういったエピソードが多く、心の遣い方を教えられます。

佐々木先生とは15年以上にわたって、子育てを中心にした仕事を一緒にさせていただいていますが、先生の『穏やかな人柄』はますます磨きがかかっているのを感じます。

その先生と相田みつをさんというすばらしい詩人が出逢うことになりました。

「育てたように子は育つ」 目次

発刊にあたって〔杉浦 正明〕	1	そのままで	48
みんなほんもの	8	人間はねえ	52
欠点	12	自己顕示	56
肥料	16	育てたように	60
待つ	20	あんなにして	64
ひとりに	24	点数	68
出逢い	28	道	72
しあわせは	32	泣	76
遠くから	36	つまづいたって	80
いいですか	40	子供へ二首	84
自分の番	44	解説対談	89
		佐々木正美／相田一人（相田みつを美術館館長）	

という先生には、その楽しみを奪ってしまったかもしれません。「いやいや、そんなことはありません。楽しく往復の車中、考えさせてもらいましたよ」と言っていたとき、改めて感謝しております。

さて、相田みつを美術館の紹介もしたいと思います。この美術館が実にいいし、職員がまたいい。詩を体験されたような職員の姿勢に、美術館の精神が脈うっているのを感じます。相田・人館長にそんなことをお話ししたところ、「いやあ、まだまだです」と謙遜けんそんされていましたが、その日の反省会でしょうか、人の波が消えた静かな館内でのミーティングをわたしは目にしましたが、いい光景でした。

子どもとかかわる職業者としてわたしは詩の影響を受けてきましたが、都会の故郷として美術館もまた多くの人たちを癒いしていくことでしよう。

子どもは未来からの使者といわれます。この使者たちにどんなバトンをおとなたちは渡すのでしょうか。そのことも相田さんはいのちの詩を通して話しかけてくれます。精神科医の思索と、緒になったこの本が子どものしあわせに役立つことを願ってやみません。

子育て協会所長 杉浦正明

（*相田みつを美術館については巻末に記載があります。）

育てたように
子は育つ

相田みつをいのちのことば

なるんだよ

みんなそれぞれに
ほんものな目に

骨を折って

にせも回に

なりたがる

みっを

み

みんなほんもの

トマトがねえ

トマトのまままでいねば
ほんものなんだよ

トマトを、ほんに

みせようとするから

にせもの

私たち大人だって、自分に自信がないとき、あるいは自分が子どもだったころに自分の親や教師から、それでいいよと認められ愛されてきた経験がなければ、こういうきわめて当たり前なことばの、本当の意味に気づかないものである。そして、いつもいつもそれではダメ、こうでなければダメと言われ、トマトじゃダメだ、メロンになれと言われ続けてきたのでは、子どもたちに「そのままでもいいがな」「トマトのままでいいがな」と言っていることはできないのかも知れない。

でも努力して、トマトのままでいいよ、トマトのままだいいよと、心から言ってやれる大人になりたいと思う。そうすれば子どもたちは、それぞれがほんもののまま輝くから。

みんなほんもの

トマトがねえ

トマトのままでいれば

ほんものなんだよ

トマトをメロンに

みせようとするから

にせものに

なるんだよ

みんなそれぞれに

ほんものなのに

骨を折って

にせものに

なりたがる

両親の「理想の息子」だった自分は、無意味な存在

古い柱時計の文字盤の中に「恐ろしい悪魔のような顔」が見え、「いつもいい子ぶってばかりいるなっ、この八方美人めっ!」と話しかけてくる幻覚に悩む大学生が、両親に伴われて来た。「理想の息子」だった自分の半生を無意味と感じ、それまでの行動はすべて「やりたいこと」よりも「やらねばならないこと」に支配され続けてきたのだと思えた。「やらねばならないこと」は、両親の願望であった。青年は、青年期に至ってやっと、親にとって理想的であることが「自己の不在」と同義であることに気づき始めたといえる。

『雨の日には……』所収

欠ら実まゐるが

えで信ずる



これは子どもを育てるために必要な最高の愛、最も自然な愛のある態度である。子どもが最も安心して成長していける親や教師や大人のありようである。子どもに最も大きな自信を与えることができる大人の姿である。私たちは相手が花であれば、どんな花にでも、その色や形や咲く季節などを気にかけることなく、それぞれが十分に美しいと感じることができる。

そのように、子ども一人ひとりをそのまま十分に美しいと感じることができるような感性を、私たちも一人ひとり磨きをかけて子どもを迎えてやりたいと思う。

私には、この「信ずる」が快く響く。「認める」ではなく「信ずる」というのが何ともいい。子どもは認められているより信じられているほうが、ずっと生き生きすると思う。こちらの価値観を修正して相手を認めるのではなく、子どもの存在そのものをそのまま信じていてやるのである。信じるとは、信じる者にとってもこの上ない安らぎである。

欠点まるがか

えて信ずる

子どもは、わかってもらいたいのだ

中学二年から登校拒否状態に陥り、強度の不潔恐怖を伴った強迫神経症に苦しんだ少年がいた。体が汚染されたと感じ、何時間も入浴したりした。父親は少年を頭から「ろくでなし」と決めつけ、少年は「どうしても自分をわかってもらえない」と苦悩した。少年は家出したが、盗みでつかまり、教護院での生活を六か月強いられた。だが教護院生活で少年はたくましくなった。住み込んだ新聞店主の忠告で、菓子店に勤めた。教護院の教官や新聞店の店主が自分をわかってくれたと思ったのだろっ。いまは菓子職人となり二児の父である。

みんなな肥料に
なったんだなあ
じぶんが自分に
なるため

みつを 

新版『いちずに、本道いちずに、ツ事』所収

存在する意味や価値のない人間はひとりもない。ということとは、だれにとつても意味のない時間はないということである。あらゆる時間のあらゆる営みに意味があり、それぞれの人間の歴史を刻んでいく。

怠けて^{なま}いるように見える時間は、大抵は心のエネルギーの充足のために必要な休息の時間なのだ。休息のあとに続く活動や思索のために必要な、本当に必要な休息の時間なのだ。どんなに長く続く休息に見えたつて、本当に必要な時間なのだ。そのことは、本当に十分の休息を与えたあとになつてみるとよく分かる。分からないのは、不十分なうちにせき立てて次の活動に追い込むからである。

本当に必要な休息や回り道の時間なのに、だれかが怠けているなどと^{きこ}言うものだから、やがてその子は自分のことを、本当に怠け者で存在価値が小さな人間だと思ひ込んでしまう。初めから自分の価値が小さいなどと思つて生まれてくる子どもは決していないのに。

悲しみや苦しみを乗り越えて生き抜く力を子どもに与えることは、自分の価値が大きいものであることを常日ごろ教えておいてやることである。自分の価値を信じる力、深い静かな自信を育てておいてやれば、苦しみや悲しみは喜びや気楽さよりも、真の人格を育てるために大きな潜在力になるであらう。

だがしかし、自分を信じられるような愛情に恵まれないまま、悲しみや苦しみが与えられたら、子どもは自分の人格を破壊してしまう。生きる力さえ失つてしまうこともある。

肥料

あのときの

あの苦しきも

あのときの

あの悲しみも

みんな肥料に

なつたんだなあ

じぶんが自分に

なるための

若者の真の成長には、「むだ」が必要

親に対してひどい暴力を振るう男子の中学生や高校生の相談が後を断たない。両親の不幸もさることながら、自分の親に暴力を振るわなければならない若者の無力感、孤立感に、同情や思いをはせてしまふ。若者の十何年間かの過去に、年齢相応の思索しそくをするぶん困気や、時間的・精神的余裕が、どれほど与えられたか疑問だ。少年や若者が、真の成長のために必要なものは、現在の親や教師の多くが軽視しがちで「むだ」と思われる行為のなかにある。登校拒否で高校を一度中退し、社会人生を経験した後に復学した例も少なくない。

待ってゐなしき
ことばかり

それでもあたしは
じつと待つ

みつを



待つ

待つてもおだな
ことがあゐる

待つてもだめな

こともある

子どもは草花を農作物より、何をも育てるに上手な人は、待つことが上手な人だと思ふ。待つことに喜びや楽しみを感じて待つ人である。待つことの喜びは、日常の努力と相関する。最善を尽くしているという実感があれば、待つことの楽しみは最大になるであらう。そして、結果を問わない気持ちで待つことができれば、待つことは安らぎでもある。

子どもを育てる時、努力と結果を問題にするならば、先の結果よりも努力の「今」に共感をこめたりたい。休息の「現在」であれば、その現在を静かに見守っていてやりたい。休息が終わって活動を再開するのを、いつまでも待っていてやりたい。はた目には待っていていいや、なことが無駄だったように見えたもの、かけがえない親子のような関係の者にとっては、苦楽を分かち合った者にはかけがえない存在の重みの感動が必ず残る。だからじっと待っていてやりたい。

深夜に帰る子どもを寝ないで待っていてやること、雨の日に傘を持たずに出かけた子どもを、駅の改札口で傘を持って待っていてやること、子どもを育てることも農作物を育てることも、一育する「一」ということは、そうしたことの積み重ねである。子どものために、そういう日々の営みの連続に、ひそかな誇りのある喜びを感じ続けていてやりたいと思う。

子どものなかの自律性や自立性は、待っていてやるからこそ育つ。

待つ

待つてもむだな

ことがある

待つてもだめな

こともある

待つてもなしき

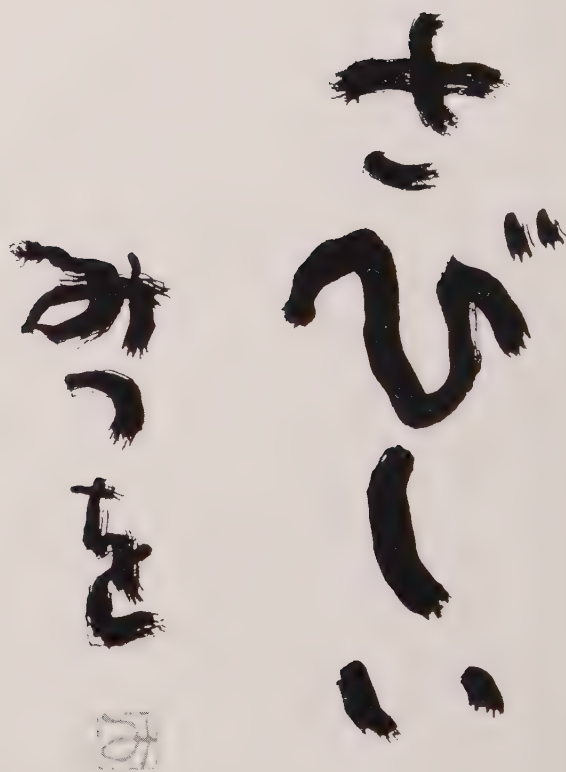
ことばかり

それでもわたしは

じっと待つ

「やらねばならないこと」より、「やりたいこと」を

ささいな親の注意にカッとして、母親のろつ骨を折ってしまったり、家中のガラスを割ったりする若者もいる。彼らに共通していることは、小さいころは「素直ないい子だった」「ことである。じつは、「やらねばならないこと」を優先する習慣がついて、本当にやりたいことをやる能力を失ってしまったのである。彼らはそのことに大きな不満と悔いを感じ、混乱し、人生を最初からやり直そうとしているように思えてならない。両親は、自発性や創造性が育つよう、干渉しすぎないやり方で根気よくやり直さねばならない。



相田みつを美術館所蔵

い
とり
は
な
り
た
い
い
い
とり
に

子どもも大きくなるにつれて、ひとりになって気持ちや安めたり、思索をしたりする時間や空間が必要であろう。くつろぐこと以外にも、希望、反省、計画、さまざまなことに思いをめぐらしながら、ひとり静かに自分と対話をする時が欲しい。子どもでなくたって誰でもひとりになりたい時がある。

しかし、しかしだ。必要ならばいつでも、話し合いや相談にのってくれる友人や家族がいなければ、そう容易に希望など抱けるものではない、素直に反省もできるものではない。

「孤独」になることは、時に必要である。あるいはしばしば必要になることもあるだろう。しかし「孤立」はいけない。信じられる家族を失ったり、共感し合える友人が得られなかったら、ヒトであつても「人間」ではなくなってしまう。「人」という字は、互いに寄りかかり合い支え合つて形をつくつてゐる。そして人は人の「間」にいて、はじめて「人間」になる。人はひとりでは生きていくことはできない。「ありがとう」と「どういたしまして」の繰り返し、人間の生涯である。そういう人が持つている「ひとり」の時間に、豊かな意味がある。

ひとりに
なりたい
ひとり
は
さびしい

「遊び」と「友人」こそ、人生の糧

友人のできないことを苦にして訪ねてくる少年がいる。ピアノのレッスンや勉強などのために、幼児期からあまり戸外で友達遊びをしなかった。遊びならいつでもやれると思っていたし、友人も必要になれば容易に得られると思ったから、勉強やけいこごの方を優先させた、と母親は言った。最近、勉強のよくできる子どもは珍しくないが、遊びの上手な子どもにはめったに出会うことがない。遊びのできない、友人も得られない子どもたちは、社会生活が困難であり、学校や社会での孤立は避けられず、不安と無力感にとらわれる。

相田みつを美術館所蔵

出逢い

いづいどこでたれとたれが
どんな出逢いを

するか

それが大事なんだ
なああ

めうと


人間の学習力の豊かさと強さには驚かざるを得ない。彼ら彼女らは、育てられたように育っていく。オオカミに育てられた少年・少女の研究や観察の記録に接すると、幼いころの人間の学習力や柔軟性には、本当にあらためて驚かされる。

オオカミ少年たちは決して二本足では立つて歩かず、四つ足で走り回っていた。手掴みで食事をする事なく、手にあたる前足で食物を押さえておいて、そこに口をもつていつて食べたという。この場合、親オオカミが口で言うことを子どもたちが守ったのではなく、親の生きざまを見ているだけで、そのように育ったというところが心に響く。

教育は口や言葉でするのではなく、ただ手本を見せておくだけという事実を、あらためて教えられる思いである。子どもたちはオオカミに出会ったから、見事にオオカミになった。口であれこれ言われたからではないし、手とり足とりオオカミの作法を教えられたからでもない。オオカミに出会ったからオオカミになったのである。

私たちの人生は、出会いと別れがすべてである。「人の世の辛不幸は／人と人が／逢うことから／はじまる／よき／出逢いを」『おかげさん』所収——これも相田さんのことば。

出逢い

いつどこでだれとだれが

どんな出逢いを

するか

それが大事なんだ

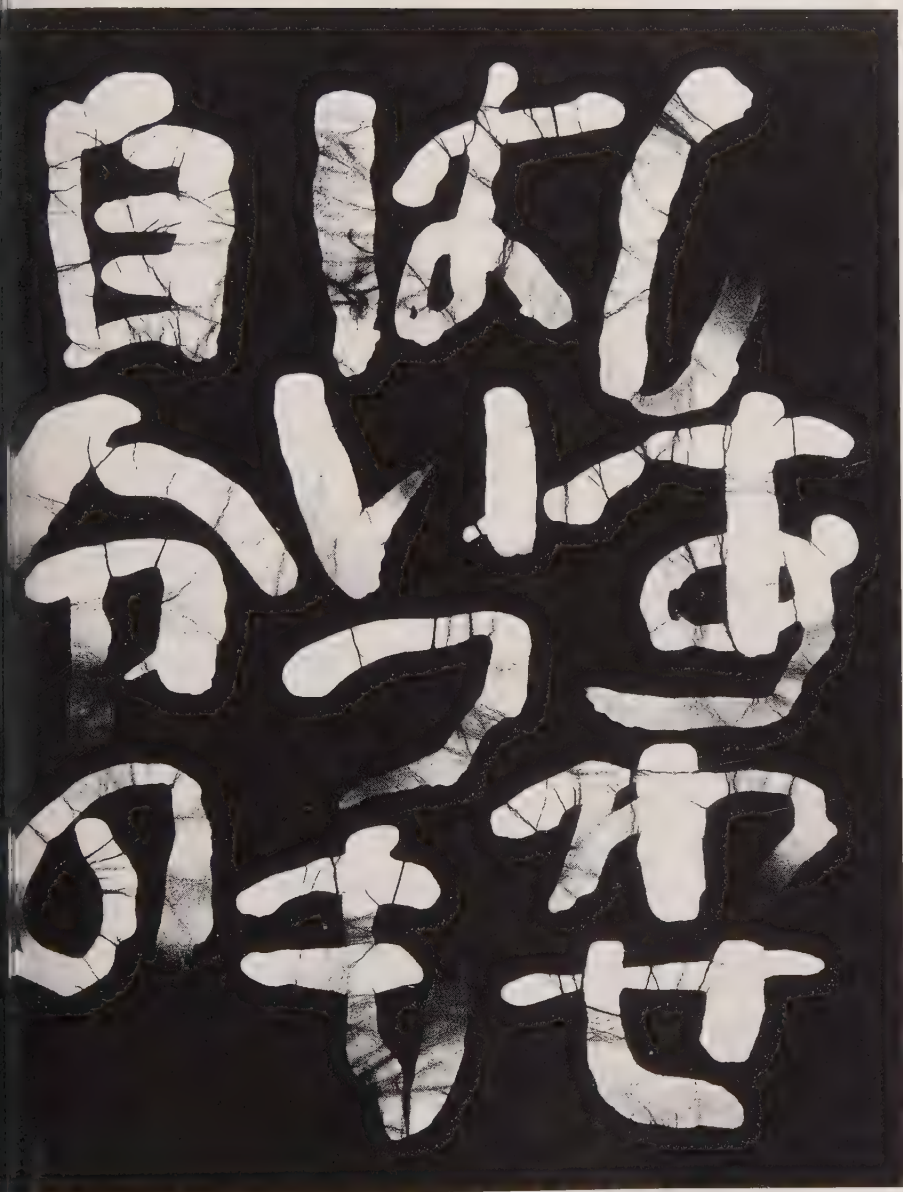
なあ

友人を作れない子どもたち

学校はいまや「集団」ではなくて生徒の「群」にすぎなくなってしまったという教師の嘆きをよく聞く。また、子どもに友人ができないという親の相談も増えている。安定した自我の成熟や人格の発達のためには、集団に参加することが必要である。受験勉強に追われ、クラブやサークルへの参加もままならない現代の若者は、旧世代との間の断絶だけでなく、同世代の相互間でも断絶し合っている。受験戦争のライバルとして友人を敵視しているような子どもさえいる。彼らの慢性的不安の根源は、社会的な孤立にあるといえる。



新版『いちずに一本道いちずに一ツ事』所収



人間的活動の中心は、能動的・主体的に、自分自身

[illegible]

しあわせ
はいつも
自分の
心がき
める

人形劇団に入ったら、体の痛みが消えた

志望大学に入学できず、他に何もするあてがないと悩んでいた女子短大生が、全身の痛みに苦しんでいた。音楽家を志望していたが、入試前にある音大の夏季講習に参加し、自信を失った。志望を別の大学の文学部に変更したが、入試に失敗。たまたま受けた保育短大に「受かってしまつて」から、全身の痛みを訴えるようになった。医学的検査では異常はなく、心因性の痛みではないかと疑われた。応対した私は彼女に、楽しみながら参加できるクラブ活動を勧めてみた。人形劇団に入り、音楽を担当するようになって、痛みを口にすることはなくなり、元気になった。

遠くから

『雨の日には……』
所収

土曜
日
から
お
で
い
る
ら



知的発達障害の人々の結婚生活を支援しているひとたちに各地でよく会う。私自身もそういう人たちの活動を応援してきた。

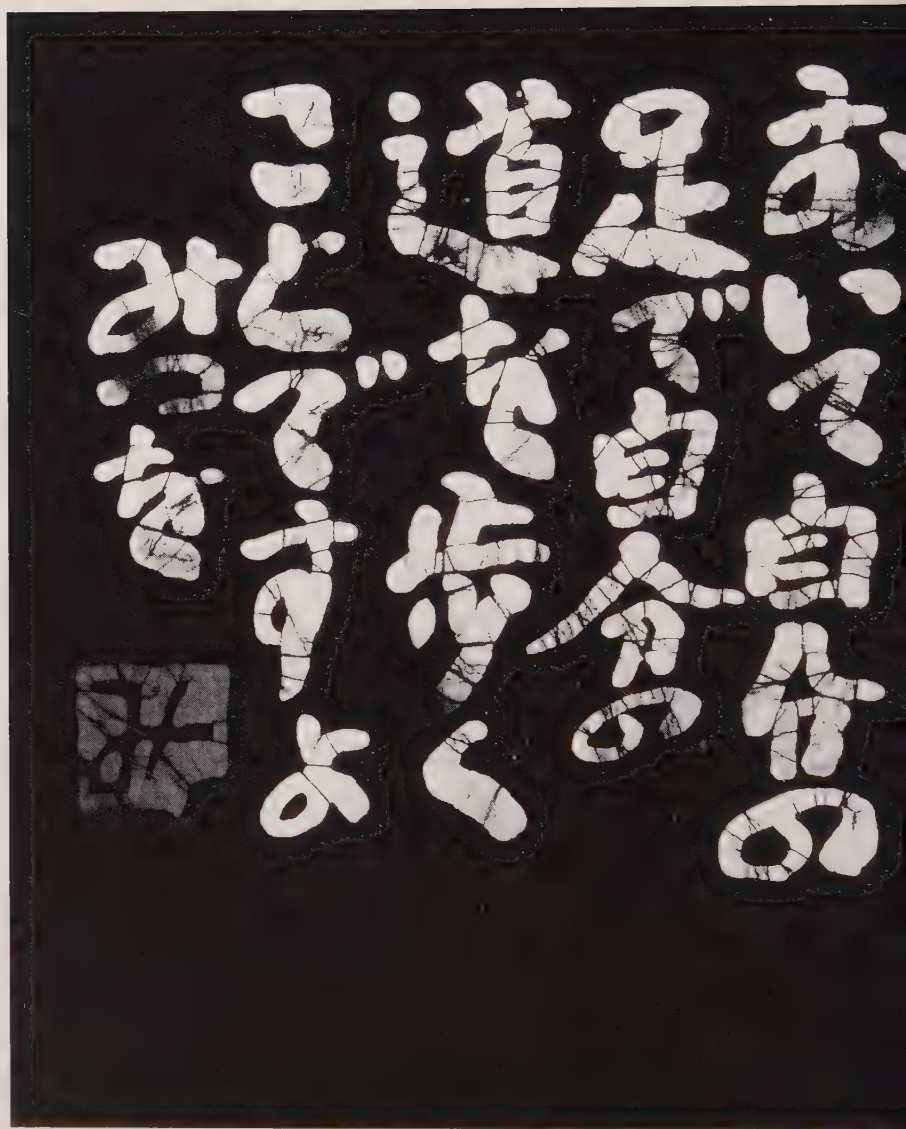
そういう人々の生活を、年輩いた両親が支援していることもあり、第三者が援助している場合もある。しかし一般には第三者が応援している場合の方が、成功していることが多い。「遠くからみている」からであろう。だから両親が若い障害者夫婦と同居している場合が、最も破綻をきたしやすい。両親がスーブのさめない距離より、もう少し離れたところから見守ることができている場合が、若い夫婦の生活は最も安定している。

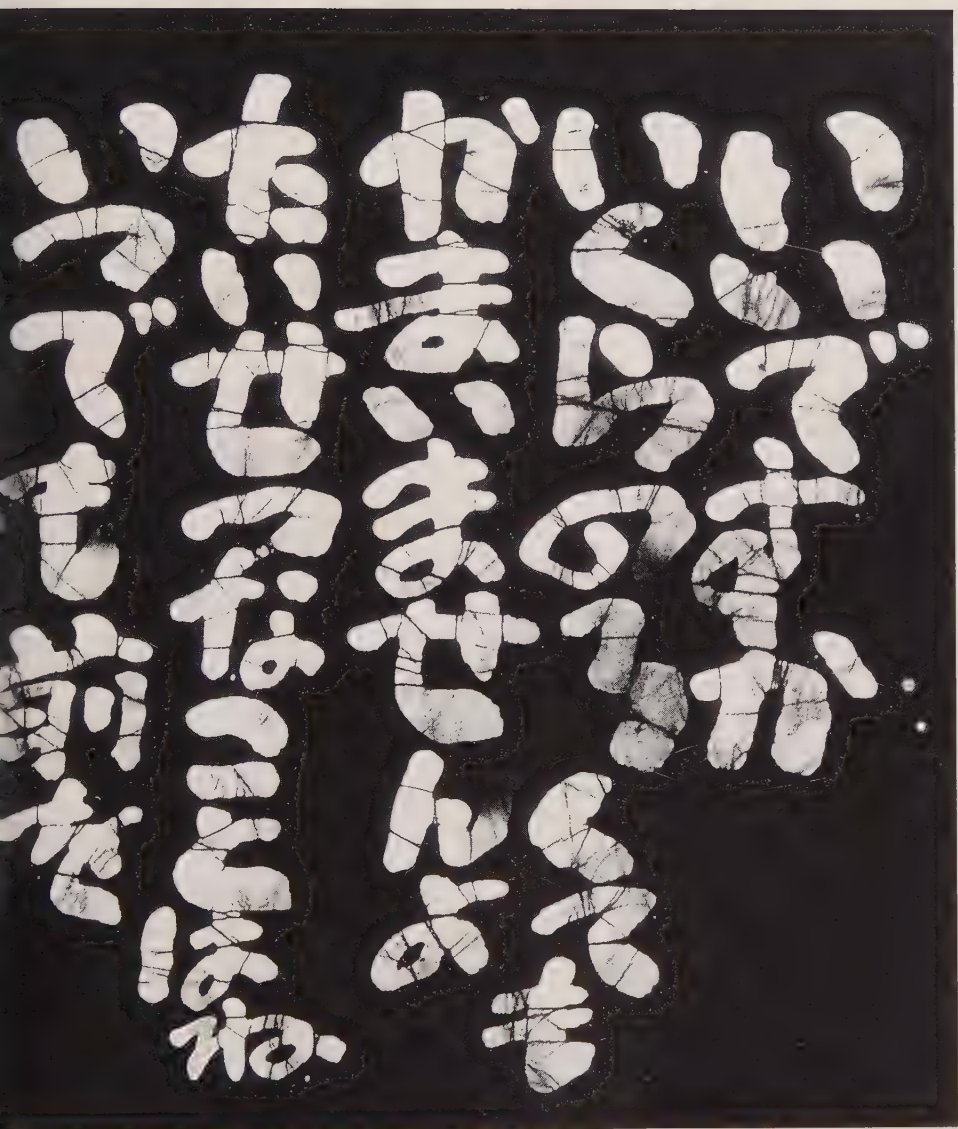
子どもの自立を助けるというのは、そういうことであろう。しかし、遠くからみていることができるのは、みている人自身の自律や自立がしっかりしていなければならない。相手を信じられない人は、実は自分を信じる事ができないでいる。

私は子どもを育てるということは、遠くから見守ることと、信じて待つということだと思っている。

母親の過剰な配慮は、逆効果

極端に子どもの生活に深入りする母親は、自分の夫との精神生活が不在している場合が多い。夫との生活に充足感が得られないから、子どもの将来への幻想にすがろうとする。ところが母親の過剰な配慮に、子どもの方で感謝しているケースは余りない。深夜の勉強中、夜食を作ってくれても、志望大学に合格できなかったときの母親の落胆ぶりが思われたりして、感謝するより先に、子どもは家や両親から逃げ出したくなる。自立を阻まれ、親の存在が重荷になる。家出をしたり、拒食をしたり、暴力的な反抗を繰り返したり、時には自ら死を選んだりする。





私はこんな子どもを持ちたいと思う。いつもほどよい努力をしている子を。しかし、決して努力の程度や結果は問わないでいてやりたいと思う。

努力をしてよい結果ができれば、それは最高だが、たいして努力をしなくてもよい結果に恵まれるような幸運な子どもよりも、努力をしてもよい結果が得られない子どものそばにいられることに、本当に大きな幸福を感じていることを十分に伝えてやれる親や大人でいたいと思う。

いいですか

いくらのろくても

かまいませんよ

たいせつなことはね

いつでも前を

むいて自分の

足で自分の

道を歩く

ことですよ

若者に、各人各様の人生の目標を

毎日自宅で「コロナ」している若者がいる。退屈だが何もやる気がないので、そうしているより仕方がないという。自由社会で高度の経済成長を成し遂げた社会には、もはやそこに住む人々の間に、生きていくことへの共通の目標がない。価値観が多様化し、不統一で混乱しているとかいわれる一方、多様な価値意識をもてるはずの社会で、若者たちの生き方は、女学生のルーズソックスのように恐ろしいほどに画一的である。明確な人生の目標が、今日ほど各家庭に求められている時代はない。でないと、根なし草のような若者が、次々と生まれてくることになるだろう。

過ぎ去る毎日のうちの
バリンと受けつけて
いまここに自分の道を
生きている

それがあなたの中の
それがわたしの
いのちです
みつを

自かつ一番

父と母で二人

父と母の両親で四人
そのまた両親で八人

こうしてかぞえてゆくと

十代前で一〇二四人

二十代前では

なんと百万人を

越すんです

世代性を生きるという言いかたがある。エリクソン(*)はそれを壮年期のもっとも健康で幸福な生き方であると言った。先の世代の人たちが残してくれた多くの文化遺産を学び受け継ぎ、自分の時代を生きたあかしとして、先人の業績の上に小さな加筆や修正を試みて、それらを次の世代の人たちに残していけるという生き方である。

こういう生き方の幸福感は、壮年になって突然やつてくるわけではなく、それまで生きてきた個人の歴史の上に築かれるものであろう。

運動会のハイライトのリレー競走を、信じ合える仲間たちとチームを組んで、ただ与えられた能力のままに、一生懸命走るリレー競走のようなもので、バトンを受け継いでただひたすらに走るあの緊張と誇りの気持ち、子どもたちの人生に与えてやりたい。いのちのバトンを受け継いで、今自分の番を走っている爽快感、気持ちの高ぶりと、誇りのある日々を与えてやりたいと思う。

「俺のことを断りもなく勝手に生みやがって」、こんなことを親に向かって言う若者に出会うようになったのは、私の二十余年の児童臨床のなかで、この十年余りの間のことである。野辺の花のようにただ咲けばよい、自分の命の番をただひたすらに咲けばよい。こういうメッセージが、子どもたちの心の奥底に静かに自然に届くような社会を作りたい。児童精神科の臨床医師として、ただひたすらそう念じている。

自分の番

父と母で二人

父と母の両親で四人

そのまた両親で八人

こうしてかぞえてゆくと

十代前で一、〇・二四人

二十代前では

なんと百万人を越すんです

過去無量のいのちの

バトンを受けついで

いまここに自分の番を生きている

それがあなたのいのちです

それがわたしのいのちです

祖母を見舞う青年を愛した、かつての非行少女

ある寺院の娘が、脳震とうや全身打撲で入院してき
た。いわゆる集団不純異性交遊の事実が父親に知れて、
ひどいせつかんをされたのだ。娘はそれから高校を卒業し
て三年後、ある青年と結婚した。彼は幼くして両親と
死別し、母方の祖母に育てられた。娘が青年と出会っ
たとき、その祖母は恍惚の人となって老人ホームに入っ
ていた。毎月一回定期的に土産を持って、祖母を訪ねる
彼の行為に「涙が出た」と彼女が電話を掛けてきた。
青年が彼女に与えた感動を、親も教師も与えることが
できなくなっているのが今日の社会構造であらう。

そのまま

相田みつを美術館所蔵

い
ろ
の
ま
ま
で
い
が
た
な



これこそ、子どもへの最高の愛情の表現である。すなわち無条件の承認である。条件をつけない愛情である。こういう愛情が与えられれば、子どもは必ず生まれもったものを豊かに開花する。

しかし私たちは、たいてい、条件つきでない愛情を与えることができない。これができればほめてあげる、あれができれば喜んであげる、これができないから腹が立つといったぐあいである。そして、その条件が大きければ大きいほど、子どもは相手に対する不信感を大きくして、自分への劣等感も大きくしていく。

「『『』ということができるに越したことはないが、できなくなつていいんだよ』とか『そういうことができればいいけど、いつからそれができるようになるかは、自分できめて努力すればいいんだよ。いつまでも待っていてやるから。できなくなつて、いいんだよ』、せめてこれくらいのメッセージにしておいてやりたいものだと思う。

『そのまま いいがな』は、私がいちばん好きな相田さんのことば。本書の題名にしたかったほど好きなことばである。

そのまま

いいがな

自前の考えを持たない若者たち

親に対して暴力を振るう息子の相談が後を断たない。なぐられて鼓膜や眼球を破損した母親や、骨折した父親の話など、もはやそれほど珍しくない。暴力を振るう若者は、あまりにもあてがいぶちの日常生活を押しつけられてきすぎた、という場合が多い。親の思い通りにいったときには賞賛され、その逆の場合には落胆や怒りの顔を見せられてきた。彼らは親の顔色をうかがいながら成長しているうち、自分でものを考える習慣を育てることができないまま思春期を迎えて、実態のない自分に、ひどい不安と困惑を感じているのである。

おもしろく
ねんだな
あ
人間のわたし
あつた



『いのちいっぱい』所収

人間はねえ
自分よりも
人のほうが
よくなると

人間の誰にもある醜惡な部分である。この嫉妬心ともいうべき感情が人間の向上心の原動力だという人もいるが、醜惡な感情であることには変わりない。子どもには本来この醜惡なところはない。だから自分ない資質や能力をもっている友人に恵まれることが喜びであつたはずである。私にも、そういう子ども時代の記憶が十分にある。友だちから教えられ与えられるものがあつて、自分が生まれ変わることができたという経験の記憶が豊富にある。山中で茸がよく生息している場所、鰻の夜釣り、川での泳ぎ、兎の交配、竹馬の作り方や乗り方、水彩画の書き方、これらのことはみんな友だちから教えられて身につけた。

エリクソン(*)は、小学生のころの子どもにとって、将来勤勉に生きていくための社会的人格の基盤は、友だちから多くのことを学び、自分のもっているものをありつけた友だちに教え与えることによって形成されると言っている。まったく実感であり名言だと思う。人間が社会人として勤勉に生きていくためには、少年時代からそういう友だちとの相互関係が不可欠なのである。だから私たちは、自分よりも優れたものを豊かにもっている友だちに恵まれるように、子どもを育てなければならぬ。そういう友だちをもつことの喜びを十分に体験する前に、「偏差値教育」のようなことをしてしまうことは、子どもの人格をどのように壊してしまうか、私たち大人はもう十分過ぎるほど教えられてしまったと思う。大人の醜惡な感情はいずれ身についてしまうのであろうが、そんなことは、できるだけ先送りにおいてやりたいと思う。

人間はねえ
自分よりも
人のほうが
よくなると
おもしろく
ねんだなあ
人間のわたし

教育を「外部に発注」する、教育ママ

優秀な中学や高校に合格しそうな生徒の教育ばかり熱心で、そうでない生徒を白眼視するといった批判を、担任の教師に抱く生徒とその家族に数多く出会う。過度の教育ママも少なくない。教育ママとは、自分では子どもの教育をしないで、「外部に発注」する母親のことを言うようだ。もはや今日のわが国の社会は、人よりいい学校、いい会社に入る以外の規範を示してくれなくなっている。お互いに語り終わつた後に、爽快な充実感が残るような雑談を、夜を徹してできる友人や、ゆとりを持った若者がどんどん減っているようだ。

肥料は
そんな自己
顯示
をしない
おれのような
やつを



自己顕示

「この心はおれが
笑かせたんだ
し」

土の中

自分の勲章にできるような子どもに育てようとする親や教師やスポーツの監督がいる。

子どもを育てる大人たちが、上の中の肥料のように生きるのは容易ではない。親ならなおさらそうだろう。だから、本当はそういう生き方をしなければと思い続けながら生きることが、精一杯かも知れない。

しかし、こういう生き方をしたいと思いついて大人に出会ってこなければ、子どもは安心して花を咲かせることも、実を結ばせることもできないで、人生の途中で枯れてしまうかも知れない。

上の中の肥料のように生きる。私は神を信じることで、そのような生き方の可能性に導かれつつある。神を畏れて人を恐れ^{おそ}ないでいられる。自分の弱さや愚かさを神から十分に示されて、神に罪を許されて生きたいと思う。神に見守られることで安らいでいられるからその分、人からの賞賛は期待しないでいられるし、人からの非難も恐れ^{おそ}ないでいられる。

自己顕示

『この花はおれが

咲かせたんだ』

上の中の

肥料は

そんな自己顕示

をしない

おれのような

両親の夢が、息子には重荷

親にとって家庭生活における最大の関心事は、子どもの成長である。両親はそれぞれ別々に、子どもの将来への夢を託す。親の方ではその夢と愛は、同義語のようになっているが、受け取る子ども側の側では、重荷にしか感じていないという不幸な事例が少なくない。

両親の価値観に基づいた人生の目的のようものを、日常的なやり方で教えられることなしに、ただ平素の学業成績の機械的な点数に一喜一憂されて、その延長線上に没個性的な期待をかけられるというだけの養育環境から、本当に自立できる若者は育つはずがない。

育てたように

『雨の日には……』
所収

女育ちたように
子はお育つ



親や教師や大人たちが、自分たちの思い通りに子どもを育てれば、子どもたちは他者の思い通りにしか行動できない人間になる。自主性、主体性、創造性といったものは当然育つはずがない。

まず子どもたちは、人と自分を信じていることができるように、人生の最初に無条件の愛情に恵まれてから、社会の規範を上等の手本を見せられながら、ゆつくりおだやかに教えられるのがいいのだろう。

時代や文化の影響を自分の力で上手に取捨選択できるように、自分の存在価値を実感できるような子どもにしておいてやればいいと思う。あなたはあなたのままで、他にかけがえない価値がある。君は君の道を、ただひたすらに歩めば、それで十分である。与えるべきメッセージはそれだけであろう。

結局は、子どもたちは、育てたように育っていく、育つていつてくれる。そう信じられる親になりたい、大人になりたいと思う。親が子どもの心を知っているよりも、子どもは親の気持ちをずっとよく知っている、相田さんもそう言っている。

「アノネ／親は子供を／みているつもりだ／けれど／子供はその親を／みているんだな／親よりも／きれいな／よごれない眼／でね」(『しあわせはいつも』所収)

育てたように
子は育つ

親は自分の価値観に自信を持て

売春が発覚して、補導された少女たちに時々会う。概して彼女たちに反省は乏しい。「だれにも迷惑はかけていない」と強く主張する。彼女たちには、社会の規律を守ろうとする意識や、親や家族を思いやろうとする気持ちがあまりない。その種の志向を学ぶチャンスがないからであらう。彼女たちの心を育てることに周囲の人々がいかにもとんちやくであつたかを見る思いがして、りつ然とする。親は自信を持って自分の考え方や価値観を、日常的に話題にして、子どものなかに自分で責任の負える本
当の自主行動の芽を育てねばならない。

ぐらがは
あつた

『生きていてよかった』所収

あんなにして
やった回
に
「の」に
「が」
つくと

親は子どもに、何でもしてやること自体が喜びである。子どもの笑顔を見ることが喜びである。本来そういうものであった。

ところが近年、そうでもなくなってきた。子どもが、自分の思い通りのことをしてくれた時にしか、喜びを感じなくなった親がふえてきた。すると幼い子どものほうが、親の喜ぶようすを見てほつとするようになった。やがて親が自分の子どもを育てることに負担を感じるようになって、子どものほうでも親の存在を重荷に感じるようになってきた。学校のクラスにも家庭にも安らぎが感じられなくて、朝早くから夕刻遅くまで保健室に登校しているという子どもに、私はすでに沢山出会ってきた。

「親が生きているうちに、親を喜ばせてくれる必要はない」、私たち夫婦は子どもたちにそういうメッセージを伝えながら育児をしようと心掛けてきた。でも私たちには欲があつて、天国に行つた後でいいから、ちよつぱり喜ばせてくれないかというくらいことは、伝えておきたいという気持ちは拭^{ぬぐ}えないでいる。天国で楽しみに見ているからと。この世にいるうちは、私たち夫婦は自分たちで互いに喜びを与え合い分かち合っているから、それで十分だと言い続けていてやりたい。

お前たちの笑顔を見ているだけで、この世では十分だと。

あんなにして

やったのに

『のに』がつくと

ぐちが出る

子どもは、親の「作品」

子どもがいくつになっても子離れしない母親がいる。どんなに手塩にかけて育てた子どもでも、いずれ新しい自分の世界に、親の方など振り返りもせず飛び立っていく。希望にあふれた若者というのは、そういうものである。すばらしいことではないか。その日のために、親子で努力してきたのではなかったのか。そう考えることこそ、報酬を求めない親の愛の典型であろう。子どもという「秀作」を、世に送り出した芸術家のような心境で、再び夫婦だけの生活に戻れることに、喜びと安らぎを感じられるような夫婦関係をもつておくことが大切である。

きたのではないんだよ

いんげんがさき

卓
米
女
は
佐
飯

みつを

『しあわせはいつも』所収

占

米女

にんげんはねえ

人から占

米女

つけられるために

この世に生まれて

育児や教育のもっとも重要な課題は、その子どもが持つて生まれた長所に気がついて、それを持つている子どもに心底ほればれしてやることだと思う。欠点のない人間なんていないように、長所のない子どももない。その長所を発見して、いいあと感激してやつて、そのことを子ども自身にも気づかせてやることである。そうすれば、子どもに限らず人間はみんな百点になる。

ところが親や教師や大人たちが間違うのは、子どもの長所よりも先に短所や欠点のほうばかりを見つけて、それを直させようとすることである。欠点などそう簡単に直せるものではない。自分の胸に手を当てて考えてみれば分かることではないか。そんな、どうせそう簡単に直すことなどできない欠点は、そのままにしておいて、長所のほうを見つけて出してやれば、子どもはその長所を頼りにして生きていける。

育児や教育の下手な人ほど、子どもの弱点や欠点ばかりにこだわっているように思えてしかたがない。

点数

にんげんはねえ

人から点数を

つけられるために

この世に生まれて

きたのではないんだよ

にんげんがさき

点数は後

テスト結果に異常な関心を持つ母のため、拒食症に

中学三年生の少女が、ある時から急に食べ物を拒否し始めて、どんどんやせ、ついには生命の危険な状態になったので入院治療を受けることになった。少女は小学生の時から常に学業成績はトップ。母親は少女の学業には強い関心を持ち続け、下校すると宿題の点検までした。テスト結果が百点だと歓喜し、九十五点だと失望した。娘はおもいつめ、日記に「天涯孤独になりたい」とか「自殺したら母親は慌てるだろう」などと書いていた。この少女を治療するには、他に生きがいを見つけてやり、本人の自主性の発達を援助することが必要であった。

黙って歩くんだよ

ただ黙って

寂なんが見せちやダメだぜ

そしてなあの時なんだよ
人間としてのいのちの
根がふかくなるのは

道

みつを

五

長い人生にはなあ

どんなに避けてようとしても
どうしても通らなければ
ならぬ道
というものがあつんだな

そんなときはその道を
だまうて止すことだな

愚痴や弱音は吐かないでな

親が子どもを育てるということは、まさにこの「道」を歩むことである。そして子どもも成長の過程で、親の歩み方を見ながら、通らなければならぬ「道」を歩む。しかし近年、私たち大人は、こういう道を歩むのを嫌がるようになった。劣の少ない安易な迂回路（つかいみち）を探そうとする。そして見つからないと、いらいらする。幼い子どもを激しく折檻（せつかん）するような親もいる。体罰をしないではいられない教師やスポーツの監督もいる。この子どものためには自分という支えや導きがなくてはという、静かな自信と誇りをもって、黙々と歩く親や大人が少なくなつた。

九九年に財団法人日本青少年研究所が発表した日本、中国、アメリカの三国の高校生を対象にした、親に対する意識調査の結果は衝撃的であつた。各国の高校生千名に対して、将来自分の親が高齢になつて健康状態が悪くなり、誰かの手助けなしには生きていくことができなくなつた場合、「どんなことをしても、親の面倒をみたい」と答えた生徒は、中国の66%、アメリカの46%に対して、日本は16%であつた。また、「親は自分の子どもに介護されることを喜ぶか」という問いに対して、「とても喜ぶ」と思うと答えた生徒は、中国とアメリカが同じ70%で日本は30%であつた。今世界の長寿国であり、世界で最も子どもを産まなくなつた国・日本は今、世界・育児が困難になつたのか、世界・育児が下手になつたのか。本当は、育児をいやがる国になつたのだらう。そのことを子どもたちは、ちゃんと知っている。

道

長い人生にはなあ

どんなに避けようとしても

どうしても通らなければならぬ道

というものがあるんだな

そんなときはその道を

だまつて歩くことだな

愚痴や弱音は吐かないでな

黙つて歩くんだよ　ただ黙つて

涙なんかみせちゃダメだぜ

そしてなあその時なんだよ

人間としてのいのちの

根がふかくなるのは

子育てといつ長き道のり、悲つ門田

十九歳の母親が一歳の誕生日を迎えたばかりの自分の子を抱いて、救急車で病院の救急外来にやつて来た。ひどく慌てふためいていて、錯乱さくらんに近い状態だった。赤ちゃんは全身に何力所も、たばこの火を押しつけられたやけどがあり、脱水状態でぐったりしている。後に下あごに骨折のあることもわかった。幼児の虐待である。豊かな物質文明のなかで、受験勉強という砂をかむような、無味乾燥な行事以外には、およそ思考も努力もしたことのないまま成長した世代がある。彼らは、衝動的、せつな的に行動するしかなくなっている。

いるもんが

声 を がぎり

泣くが

ただひたすらに
泣けばいい

みっ を

泣

強がりな人が
いうことないよ
やせがまんなど
することないよ
だれにえんりが

泣

強がりなんか

いうことないよ

やせがまんなど

することないよ

だれにえんりよが

いるもんか

声をかぎりに

泣くがいい

ただひたすらに

泣けばいい

豊かな感情表現は、家族間の愛がはぐくむ

学校の勉強以外に何もすることができない、という不幸な中学生や高校生に、よく会うことがある。試験の点数や学業成績の順位が気になつて、ほかのことに手がつかないのである。彼らは絶えずいらいらしていて興奮しやすく、家族中ではらはらしている。思春期は家族以外の人に、新たな愛の対象を求める時でもあるのに、最初の家族間の愛も不十分なまま、創造性の乏しい機械的な試験勉強を強いられている若者たちを見ていると、将来彼らが家族以外の人に向かつて、健康な愛や性の欲求を解放することは不可能のように思えてくる。

つまづいたって

『まじころの暦 になげんだもの』所収

つまづいたって
いいじゃないか
人間だもの



つまづかなければ学べないことが沢山ある。失敗は成功のもとである。つまづきや失敗のない成功はないであろう。先人たちはそのことをよく知っていた。だから七転八起というような格言を残したりして、後世の私たちを慰め励ましていくる。

私の親しい友人で、自閉症の治療教育で世界的に名高い北カロライナ大学のG・メジボフ教授は、よくこんなことを言つて仲間たちを励ましている。生懸命やつていれば、見失敗に終わったように思える結果がでて、それは決して無駄であつたのではなく、そこからは学ぶことが多いものである。There are no mistakes. There are only lessons.

努力や経験したことは、すべて人格の中に蓄積されて、人間を豊かにしてくれる。だからミヒヤエル・エンデ(*)は、学んだ知識の具体的な細部は忘れたつていい、試験の答案に要求されるようなことなどみんな忘れたつて、学ばなかつたということとは全然ちがうのだと言っている。私もそうだと思う。

問題は、つまづきや失敗によつて、どんなに学ぶものが大きいかということを、親や教師や大人たちが本当によく知つていなければならないということである。そうでなければ、その真意は子どもたちによく伝わるはずがない。つまづきから立ち直れないような傷つけかたをしてしまわないように、自分もたしかにつまづきや失敗が大切であつたという実体験を、生き生きと思ひ出しながら子どもを育てたい。

つまづいたって
いいじゃないか
人間なもの

人生に出発は、何度もあつていい

医学的に異常が発見されない、心因熱、心因痛、心因マヒと呼ばれる症状は、精神的・心理的な苦悩が身体症状として現れたと考えられる。音楽の世界では、古典音楽を学ぶ学生に多い。この分野は自己で進路を決定できない時期から、教育を受けねばならないからである。彼らは親の勧めに従い、幼児期から練習に打ち込み、独立した自己を確立しないまま成長した。音楽に自信をなくしたある青年は、これまでの努力を考えると簡単に音楽を放棄できず、不安と焦りで苦悩し、健康まで損なってしまった。古典芸能を受け継ぐことを運命づけられた子や、最近ではスポーツ界にも広がってきている。

い い い い
い の い い
そ ち ち ち
あ ち ち ち
あ ち ち ち
あ ち ち ち

『にんげんたもの』所収

子供へ一冊

どの道のようた
も

「こどももう一度強調しておきたいと思う。短所のない人間もないが、長所のない人間もない。だから子どもたちには「いのちいっぱい生きればいいぞ」と、ただそれだけ言つてやればよいのに、私たち大人は、ほかに余計なことを言つて、道を見失つてしまふ子どもにしてしまふ。『どのような道』でもいいのに、ここの学校でなくてはだめだ、とか言つてしまふ。

教育とは、あらゆる子どもが必ずもつているその子固有の長所を見つけて、それに感動してやること、そしてそのことを子どもに伝えてやることだと思ふ。短所を探しだして直してやることなど、本当はしなくてもよいことだとさえ思つてゐる。容易なことでは直せないし、その前に子どもの人格を、元も子もない状態に壊してしまうことが多い。

氏の言葉に「花はただ咲く／ただ／ひたすらに」『にんげんだもの』所収)というのがある。

子どもが、自分のことを好きになれるように育ててやりたい。それまでできるだけそのまま、ありのままの自分を好きになれるように。だから「そのまま いいがな」と言つてやりたい。人生の最初から言い続けてやりたい。

子供へ一首

どのような

道を

どのように

歩くとも

いのちいっぱい

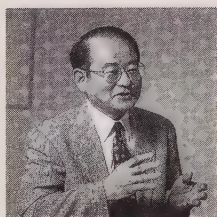
に生きれば

いいぞ

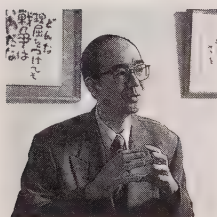
仕事を認められ、登校拒否を克服

父親を幼児期に失い、母一人に育てられた高校二年生の若者がいる。中学二年生から不登校となり、進学した高校にも通わず、オートバイを乗り回すだけの生活をしてきた。母親と診察室にきた彼は一八〇センチの大柄な体を小さくして、「何をしたらいいのか、わからない」と悩んでいた。偶然、ある党の選挙事務所の運動員が、彼にポスター張りのアルバイトを依頼した。自分でもなぜかわからないが、代表者から特別な礼をもらうほどよく働けたという。選挙事務所特有の強烈な他者への共感性が若者の心にエネルギーを注入したのだろう。それが彼の自信となり、不登校状態から脱出した。このような若者に最近よく会う。

解説対談



佐々木正美



相田 一人



杉浦正明

相田みつをからの「伝言」

川崎医療福祉大学教授 佐々木正美

相田みつを美術館館長 相田 一人

司会 杉浦正明（子育て協会）

で、まだ非常に未開拓だと思っています。そこで仕事をするチャンスが与えられ、いろんな経験をしてきましたことを伝えていこうと思っています。

杉浦 いまの子どもたちを取り巻く社会環境、若い両親の子育てのいまの状況をどう思われますか？

佐々木 いま、エーリヒ・フロム（*）の著作を読み返しているのですが、彼はこの時代を予言していたと思います。彼は自由と豊かさについて非常に深刻に考えた人ですが、「たくさんモノを作ってたくさん消費する社会に住んでいると、人は文化社会に住んでいるような錯覚を持つ」と言っています。そして、そういう文化で生産する側は、モノと同時に人間の欲望も次々作っていく、だから、どんなに溢れるほどモノを持つても、不足ばかり感じる人間を作っているというのです。

その不足をいま我々は強く感じていると思います。極端な例が、国で子どもを育てやすい社会を作ってくれないければ子どもを産みませんということです。この感覚が私たちの社会には強くあると思います。日本は世界の長寿国で、世界子どもを産まなくなった国です。もって育てやすい環境を作ってくれないければ、私たちは子どもを産まないと皆で同意し合っているような社会でしょ。では、日本は世界子どもを育てにくい国かと考えると、果たしてそうだろうかと感じます。それはフロムが予言したように私たちがわがままになった、欲望が肥大したからだと思います。

それから豊かになった分、一見、人の助けなしに生きられるようになったと同時に、人を助けるのも助けられるのも気が重い、だから煩わしい関係を避けて、独立して個性的に生きようとなってきた。そのうち人との関係が煩わしさを越えて怖くなったんです。種の対人恐怖ですね。

モノの豊かさとは心の豊かさ

杉浦 本書では、相田みつをさんの残された書から、育児に関係の深い言葉を佐々木先生に選んでいただいたものを核にしています。そこでまず、佐々木先生のなさっているお仕事についてうかがいたいのですが。

佐々木 私は子どもの精神科の医者で、一番多い臨床が、発達障害の子どもとその家族の方、次に発達障害ではないけれど、いろんな意味で社会的な適応がうまくいかなかった子どもたちを診てきました。二、十年間、あまり自分の研究はせずに、相手から依頼された仕事をしてきましたが、昨年四月から岡山県倉敷市にある川崎医療福祉大学へ招かれたのを機会に、いままでしてきた仕事を、若い人たちに積極的に伝えて最後の仕事の締めくくりとしようと思ったわけです。

といいますのは、わが国が今後とも力をいれなければならない主題は、福祉の領域だと思うからです。経済的に豊かでも、福祉的に貧しい社会では幸せになることはできないが、経済的に貧しくても福祉的に豊かな社会だったら、幸せに生きられると思うんです。高齢者、障害者、被差別部落など、一般社会から疎外されそうな人たちの力になろうと思っている若い学生たちに、自分の経験の中から、これは伝えておきたいということを、今度だけは積極的に伝えたいと思っています。

杉浦 医学の人材より福祉の人材ですか。

佐々木 そうです。医学の分野は優秀な人がたくさんいると思いますが、医療と福祉のドッキングした部分、境界線上で機能する人は比較的少ないんです。従来からあまり専門的な領域ではないと思われていた分野

ちがまずありました。この美術館を構想したのは、原作に直接触れてもらえば、相田みつをのいろんな思いや作品の中に込められた感情が直接伝えられる、と考えたからです。そうでないと本当の相田みつをは、なかなかわかりづらいところがあるんですね。

父は十七歳くらいから書を始めています。本格的に現在の相田みつを作品の萌芽が見られるようになったのが二十代後半で、館内にある作品は古いもので二十代前半くらいからのものです。二十歳くらいから自分のスタイルを確立し、六十七歳で亡くなるまでの四十年近く書き続けたので、かなりの数の作品が残っています。

杉浦 いま、観光コースにもこの美術館が入っていますよね。

相田 観光の方も来てくれますし、団体でいらっしゃる方も最近増えてますね。とくにPTAとか学校の先生方、意外に多いのが看護学校の生徒さんです。あとは医者さんとか福祉関係の仕事に従事されている方が多いですね。正反対にいわゆるその筋の人もいらっしゃったりもします(笑)。

医療関係の方はいのちを扱いますし、その筋の方もいのちがけでやり取りしていますので、そういう意味で共通項があるかなという気もするんですが。いわゆるインテリという方より、やはり体を張って生きている方にファンが多いような気がします。あとは子育てに悩むお母さんとかですね。

先日、たまたま館内で、看護婦をされている中年の女性とお話したのですが、何度も来ているが、今回来たのは息子さんが高校を中退してしまって、非常にショックで、気持ちの整理をするため遠方から来てくださったということ、作品を見ているうちにいろいろ考えて少し落ちついたと言われました。私も高校

ある中国残留孤児だった人が帰国して、新幹線に乗ってもっとも驚いたのは日本の乗客は隣り合わせた人と一言も口を聞かないことだと言われたのです。私たちは知らない人と口を聞けないんですね。こういうことが現代人の精神保健の難しい問題を作っていると思いますよ。人間は人と相互依存し合って健全に生きられる存在ですが、豊かさの中でそういう感情を失ってしまった。これが育児や夫婦の関係に難しい問題を生み出してきたと思っています。

見る人の心を映す書

杉浦 ところで相田みつを美術館（＊）は平成八年九月に開館しましたが、相田さんは館長になられる前は何をなさっておられたのですか。

相田 広告とか出版関係の仕事をしていました。父は私が二十六歳の時に脳内出血で突然亡くなりまして、作品が全く未整理のまま残っていたので、何とか整理してきちっとした形にしたいと、遺作集を出版しました。その後、全国で巡回展をやって行くうちに、いろんな縁でこの銀座という場所にすばらしいスペースが得られたものですから、昨年の九月に美術館を開設した次第です。

父は本にするために書を書いていたわけではなく、画家と同じで、定期的に個展を開いて自分の作品を世に問うてきました。ところが、本になったおかげで、多くの人に読まれるようになった反面、原作は知らないファンが非常に増えてしまったのです。そういう方たちにぜひ相田みつをの本当の姿を伝えたいという気持

いのちのバトンを受け継いで

杉浦 佐々木先生のお好きな作品は？

佐々木 この中では『欠点まるがかえて信ずる』とか『そのままでもいいがな』という作品。同じ意味ですね。それから『待つてもむだな』ことがある。それでもわたしはじつと待つ、この「待つ」というのは、ものを育てるための神髄だと思っています。欠点まるがかえて信じてそのままでもいいよと言って待つてあげる、これだと思っています。相田みつをさんの「番すべ」ところは、それぞれ皆価値があるよとおっしゃっていることだと思えますよ。これは森田療法（＊）そのままですよ。我々が精神療法する時の基本なんです。だから精神科のクリニックにこれがあつてもいい。そうすると医者は多少手を抜いても治療できるかもしれない（笑） よけいなことを言ったりしないという意味だね。それから「いのちのバトンを受けついで」ということが出てくる『自分の番』も好きですね。

相田 この前の美術館で、女優の中井貴恵さんとジャーナリストの吉岡たすくさんのテレビの収録があつたのです。そのとき、吉岡先生が中井さんに「どの書がお好きですか」と聞かれますと、『育てたように』は育つ』だということでした。中井さんは子育て真っ盛りで、昔はピンとこなかったけど、いまは実感されるとおっしゃっていました。その時々で、好きな作品は違ってくると思うんですね。

佐々木 本当の親になった時、『育てたように』子は育つ』はピッタリとくると思いますよ。こんなふうに育てた覚えはない、あるいは社会や学校教育で子どもが歪められたというのは、まだ親になってないんですね。

時代、学校をやめたいと親を心配させましたので、そういうことを思い出してしばらくお話を伺いました。迷ったり解決のつかない問題をかかえてこちらに来て、しばしの間、心が落ちつく時間を持たたとおっしゃる方が多いですね。そういう意味で、一般の美術館と微妙に違うところはあるなあと思います。

杉浦 佐々木先生は最初この美術館にいらした時、熱心に見られていましたね。

佐々木 はい、本で見るのとはやはり違ったのです。静かな迫力があつて全然違うと思いました。びつくりしましたね。

杉浦 ふつう美術館というと絵などを想像しますが、美術館と名付けられましたのは？

相田 美術館の定義にはいろいろあると思いますが、父の作品に『うつくしいものを／美しいと思える／あなたのこころがうつくしい』（『生感動 生青春』所収）というのがありまして、長年父が書き続けたことばなんです。それは「美」に対する父なりの考え方だつたと思うんです。そう考へて作品を作り続けた人間が残した書もやはり「美」ではないかと思ひまして、美術館に落ちつきました。

佐々木 絵画や彫刻だけでなく、手芸とか刺繍とかが美術ということに、ぼくは何も違和感を持たないですね。詩や書も広い意味で美術です。ここには多くの人が癒され、慰められる精神医学そのものがあるように思います。

杉浦 不登校の子どもにとつて、安らぎのある、いい保健室みたいな。

佐々木 そうです、だからこういう書画の複製が学校にいっぱいあつてもいいですね。そして学期単位で替わるとかね。先生も「あつそうか、教育、こうしなくちゃ」と思うものあるでしょ。

とですね。

佐々木　そうですね。おそらく教育とは欠点を直してあげるのではなく、欠点はそのままにしておいても、長所を伸ばしてあげる、あるいは本人に気づかせてあげることをだと思っんです。ところが私たちは、しばしば欠点を気づかせてしまって、長所を気づかせてやれないんです。長所は埋もれちゃうので見つけてあげないと、気づかずに終わってしまうことがある。だから、欠点を埋もれさせて長所を気づかせてあげられないのです。ところがそれができないので、「欠点まるがかえで信じてあげなさい、そのままがいい」と相田さんがおっしゃっているのは、お見事だと思っっているのです。

子はまるごと親を見て育つ

杉浦　相田館長が好きな作品はどれですか。

相田　そうですね、その時々で変わりますが、『待つ』という作品がございまして、これは父の風貌ふうぼうが浮うかんでくるような作品です。待つてもむだだけど、ずっと待つという内容にいま非常にひかれます。

父は、いったい何を待っていたんだろうと書いたことがあるんですが、父にとつてのつぴきならないというか、待つていても無駄とわかりながら待たざるをえなかったものは何かわからないながらも、子どものことだったのかなと、父が亡くなつてから時たま感じることもあります。親にとつては子どもはいつまでたつても子どもですので、もうちょっと何とかなつて欲しいということで、じつと待つて、待たされつばなしになつたのかなとい

だから中井さんは、だんだんそういう気持ちになつてゐたんじゃないかと思ひます。

杉浦 どちらかというと、子育ても社会に責任を求める傾向が広がりますね。

佐々木 そうです。育てやすいように社会を作つてくれば子どもは産まないという発想は、本来の親にはなかつたものです。

杉浦 『育てたように 子は育つ』というのは、厳しい言い方ですよ。

相田 『欠点まるがかえで信ずる』とか『そのまま いいがな』『育てたように 子は育つ』とか息子の立場で見ると、作品の背後にできの悪い子どもを持った親の嘆きが、切々と出てくるような気がして、しかたありませんけれど(笑)。

佐々木 お父さんはまるがかえしてくださつたように思われますか。

相田 そうですね、我が子だからということ、『おれにそっくり』『雨の日には……』所収)という詩も残っています。息子だから可愛かつた、とは思いますが、自分の嫌な面がそっくり伝わつて、何でいい面は伝わらなかつたんだろうという嘆きもあつたのではないでしょうか。でも、その嫌な面は自分の中にあるから伝わつたのだということを、しっかり踏まえて子どもに接していたところがあつたのではないかと思ひます。

佐々木 ぼくは書では残せないけど、自分の子どもだから、基本的に最低限のことは信じなくては、でも自分の子どもだから、過剰な期待はできないということ、親としての戒めになっています。その部分で相田みつをさんに共感できましたね。

杉浦 欠点を直そうとする親は多いですね。そういう中で、欠点をそのまま受容するというのはすごいこ

ぼくはそれを言っただけなんです。

杉浦 若者の活字離れが起きていますが、相田みつをさんの書は、見る人の心をたぐり寄せますね。

佐々木 人間誰もが持っている根源的なものは、ちよつとした文字でイメージを引き出せますが、あまり人間的でないものは、強烈なことばと長い説明、強烈な絵で無理やり見せなきゃいけないところがあると思うんです。この短いことばで皆ハッとするのは、それがとても人間的なことだからです。

杉浦 先生は相田みつをさんの詩に全面的に共感されていましたが、これは彼への共感ということですか。

佐々木 そうだと思います。人間的なものを豊かに持っている人との出会いです。実際、彼の書を見てそういうことを感じない人はまずいないと思うんですよ。

杉浦 いま人間とか人生を語ることとは何となくダサイという風潮があると聞いているんですが、相田さんの書は人間そのものを見つめるところがありますね。いのちという言葉が使われていますし。

相田 そうですね、父は心とか魂ということばはほとんど使わなくて、いのちということばが多いですね。いのちということばを自分の仕事の中心に据えたんだろうなと思います。

杉浦 真面目な若者の来館が多いですか。

相田 確かに真面目な人も多いですが、一見不良っぽい子や茶髪の子など、いろんな人がみえるんですよ。暴走族の雑誌が取材に来たことがあります。何で来たかというところ、暴走族の女の子が拒食症になって自殺未遂までして、立ち直るきっかけが父の本だったということ、相田みつをとは何だろうと取材に来てくれたんです。

う気もしています。

佐々木 育兒に失敗する親は、遠くから見えていられない親なんです。ぼくは育てる喜びということは待つ喜びだと思っています。自分の子どもが挫折したり迷った時、親としてどれだけ待つてあげられるかが親の最大の役割だと思っています。待つ間、親が心配しない、悩まない、いらだたないために、夫婦で待っている何年間も豊かに会話をして、両親の世界をちゃんと持つ。子どもに近付き過ぎずに遠くから見ている。これは、人ではできないことです。その間(ま)を夫婦でもたせることが大切だと思います。もちろん子どもを信じられなかったら待てないですね。

世代を越えることばの重み

杉浦 相田みつをさんは佐々木先生より、回り上の世代ですね。こういう詩の理解は、若い人の理解とまた違うのでしょうか。

佐々木 どうでしょうか。この美術館に来て若い女性が多いのに驚きました。だから感じることは同じかもしれないかもしれません。あるいは相田さんが誰にも普遍的ふへんにある同じところを指摘して下さったのかもしれない。それに若い人の方が気づき方が強烈で新鮮でしょうね。せつかくこんなに感じる力を持っている若い女性の感受性を、いまの日本の文化は殺そうとする方向に働いている気がします。その感受性のままに結婚して子どもを持つて、子どもを信じてゆつくり待つて育てれば大丈夫と、今日の文化人たちは一般に言いませんが、

現在の社会風潮は、自分とちゃんと向き合って対話をすることを避けるように仕向けているところがあります。一つは経済最優先の生き方がもたらしたのでしょう。消費させることに夢中になって、自然との対話とは別の次元に人間を置くことになりました。困難を避けてハメを外して新しいものを追い求め、何でもかんでも前衛的なことが価値があるようなとんでもない社会を作ってしまったと思いますね。でも、当たり前前のかつを当たり前と感ずる感情は誰も失つていなかったから、書を見てそれに「ハッ」と氣づかされると思ふんです。これらの作品の中にそれを強く感ずりました。

相田みつをさんは、決してきれいなことを言っていない。『ひとりになりたい　ひとりはさびしい』は、人間はわがままなもので、勝手な時に一人で勝手なことをしていたいが、結局誰かと、緒でなくては生きられないということと言っている。そういう自分の身勝手さと彼は闘っていて、我々もそれぞれ闘っている度合いに応じて感ずるんだと思うんです。そういう意味ではとても人間味がありますね。待つていたつてどうにもならないけど待つている、なんていう詩もそうでしょ。とても正直です。そして苦しみぬかれたから、そこへ到達されたということを感じます。

相田さんの書を見ると、自分を大切にしようという氣になりますね。あなたはこんなに大切な人じゃないですか、こんなに価値があるじゃないですかと言つてもらつて「あつ、そうだ」となるでしょ。本来これは親や教師から子どもにたくさん言つてもらふのがいいんですよね。

杉浦　佐々木先生、これから診療の中で患者さんに、こういう詩があるよ、私の氣持ちはこの詩といつしょだということになりますね(笑)。

暴走族は仲間を求めて集う孤独な少年少女という感じがするんですね。こういう雑誌を読んでいると、非常に傷つきやすいし、傷ついたからこそああいう世界へ行っちゃったような感じがする少年少女が多くて、父の書に接するとビビッドに反応してくれる感じがします。

いろんな方がみえるのですが、特に若い世代はすぐ真剣に考えている。格好かっこうを見るとあまり真面目な感じはないんですが、残されたアンケートを見ると、自分のことを見つめて思い悩んだり、とにかく真剣に見ているんですね。

父の作品は決して単純に答えを出してないと思うんです。こうしなさいとか、こうすれば幸せになれるとか全然言っていない。作品の余白の部分がとても広くて、それを自分で読み取りながら見て考えざるを得ないんです。だから、父の作品を見た人たちは、最終的には自分と対話するような感じになっているのではないのでしょうか。

ありのまま、そのままを大事に

佐々木 相田館長がおっしゃったように、お父さんの書は自分と対話させるものだから、真面目にさせてしまうところがありますよ。そういう意味ではお父さんは、熱心に自分との対話をされた人だと思います。精神療法のように自分を見つめ、知ることが出来るわけです。何かを模索している人が見て、自分と対話ができる安らぎや喜びは大きいと思いますね。

す。活字で見てもピンとこないのですが、書で見ると伝わってくるものがあります。背後のいろいろな思いが凝縮されて、これ以上ないくらいに削ぎ落とされて、一つのことばが生まれているということを感じていただければ、ありがたいですね。

父親と母親の役割

杉浦 子育てに引用できるような詩を今回集めてみたわけですが、相田みつをさんの父性的な愛がたくさん感じられた気がします。いま父親不在であるとか父親の生き方について、いろいろ言われているわけですが、この詩を通してどのように感じられましたか。

佐々木 ぼくは父性をたくさん感じましたよ。もちろん母性もあるかもしれませんが。父性というのは生き方の道しるべを示すことだと思います。母性は保護的役割です。豊かな父親には父性も母性もありますね。母親だって父性的なものはありますよ。両方を誰もが持っていると思うんです。この中で読み取るのに、あえて父性的なものが大切だとも思いましたね。生き方の道しるべをちゃんと示している。だけど子どもが育てられる場合、父性的なものは、まず母性的なものが十分与えられた後に機能するのだと思いますね。

単純な中に複雑な問題があるのも確かなわけです。たとえば、母性的なものの上に父性があるというのが、一つの言葉に含まれていますよ。「こう生きようじゃないか」と示す前に「君そのままでもいいよ」と保護的な救済がある。母性的な前提があつて、はじめて父性は機能するのですから。

佐々木 『そのままがいいがな』なんて、折にふれて話しますよ。ぼくがこう思うというのは大切ですが、それ以上にそう思っているのはぼくだけじゃないことを伝えるのは、大きなインパクトを与えるので、相田みつをさんのことは時々話します。『待つ』は何度言ったかわからない。親はなかなか待てないんです。待てなくてダメにしたり、トマトをメロンにしたがつたりして。

杉浦 書から感じられる相田さんは他人に優しく感じられますよね。いまは自分に優しく他人には強いという人が多いですが(笑)。

佐々木 『欠点まるがかえて信ずる』とか、『そのまま いいがな』と言ってあげられる、待つてあげると言えるのはとても優しい忍耐強い。優しさとはそういうものだと思いますよ。

相田 父の作品についてよく誤解されるのは、人生訓ととらえられてしまうことです。そういうのとは全然違うんですね。訓は教え諭すという意味が強いですよ。上からの物言いになりますから、受ける方は常に身構えて心が固くなつてしまい、感動は起こりません。父の作品には、それを見る人と同じ地平から物を言うのが大前提としてあると思うんです。決して人生訓のようにとらないでいただきたいというのが、私の一つの願いです。

もう一つは、見単純な短いことばですが、非常に複雑なものを秘めているということ。だからできれば原作に直接触れていただければありがたいと思います。『そのままがいいがな』にしても短いことばですが、考えていると背後にいろんなものがあるわけです。『欠点まるがかえて信ずる』ということばがあつて『つまづいたっていいじゃないか 人間だもの』があつて、そういうものを踏まえた上での『そのままがいいがな』なので

相田 どちらかというと、父より母から叱られることが多かったですね(笑)。

佐々木 父親はやはり、子どもが自分を鑑(かがみ)にして生きるだろうなと思っていますよ。私もそれがありますからね。お客様が来られた時、きちんとあいさつしろというようなことをぼくは子どもに言わないう。でも、自分があいさつしているところを見せようとは思うのです。それから、子どもが育ち盛りの頃、ご近所などで不始末をしでかした時など、子どもと共にお詫びに行きました。その時「お前も謝れ」とか言わず、私が自分のした悪事のように謝って、その姿を子どもに見せておくことには徹しました。それは「お前もきちんと謝りなさい」と、言うのとほとんど同じことだろうと思つたのです。帰り道にはもう忘れさせてやろうと、全然別な話をしながら帰りました。こういうことは何度もありましたね。だから子どもが自分の親は優しいのか厳しいのか、問われたら困るだろうと思います。黙っていられるのも割合厳しいのかもしれないですね。

「おかえりなさい」の一言

杉浦 お父さんの詩には、ふつとおかしさがこみ上げてくるような作品がけっこう多いですね。ユーモアのある人でもあったのだと思います。

相田 真面目、方という印象は全然なかったですし、話題が豊富で座談も面白いタイプでしたから、いわゆるカタブツというイメージもなかったですね。どちらかというと柔らかな感じでした(笑)。皆さん修行僧的

私も息子に「親からお前たちへの最大の注文は、親より先に死なないことだ」と言っており、「努力しなくてもよい結果を得る幸運な人もいるが、子を持つ親としての喜びはあまりない。努力をしても少しもいい結果がでない子を見ているのも、親として非常に楽しみなものだ」というメッセージを伝えたいと思っています。だから「生懸命やれば『そのままでいいがな』と捉えています。『いいがな』は母性、でも『生懸命やるんだよ』というのは父性で、どちらもあるんですね。単純なようで複雑なものがあります。

杉浦 それから父、相田みつをを語る、ということは何いたいのですか。

相田 いわゆるしつけは厳しかったと思います。あいさつですとか、テレビを見ながら勉強するとかすごく厳しかったです。その反面、学校の成績がどうか勉強しなさいとかは一度も言われたことがありませんでした。小学校の夏休みに、私はよく宿題をやつていきませんでした。いつも計画はたてるけど、結局終わりにあたふたするんですね。ある年全然やつていなかったことがありました。その時父が私に、学校の先生に渡すようにと手紙を書いたのです。自分は夏あまり体調がよくなく、今年はずっとに悪く怠けてしまつた。自分が怠けてしまったので、それを見ていた子どもも怠けて、宿題をやつていなかったのだと思う。それは親の責任です——といった内容でした。それで、先生にはそれほど厳しく叱られませんでした。その行為自体がいいか悪いかは難しいのですが、父はそういうことをした人間でした。

私が高校時代に悩んで、学校をやめて大学なんか行かないと言ったら、やめたいのだったらやめればいい、続けたいのなら続ければいいということ、ダメだとか叱つたりしませんでした。

杉浦 お母さんは？

いるお母さんにどうこういう権利も資格ありませんが、子どもにとって母親に「お帰り」という気持ちで迎えられる喜びはとても大きいですね。その気持ちに十分伝わっていれば、父性的な生き方が伝えやすくなると思ってるんですね。

相田 父は、子どもはある時期からは父親が必要になってくるけれど、小さいうちは何といっても母親が大事なんだと言っていました。大体三、五歳くらいまでにどれくらい心豊かに育てられたかによって、その人のその後の人生が決まってしまうのではないかと、盛んに言っていたことがありますね。

杉浦 お父さんの生活は如何でしたか。

相田 財政的には、生豊かだったとは思えません。そんな暮らしの中で、個人的な贅沢はせず自分の仕事のための書籍や紙、墨にはお金を惜しみませんでした。若い頃から貧乏していても、金をかけるところにはかけていましたから、晩年も同じことだったと思うんです。

父の作品が悩んでいる人の慰めや励ましになったりして、多くの人の心に生き続けてもらえば嬉しいですね。どこの誰が書いた作品ということじゃなくて、そのことばに触れた人々に癒しを与えることがあれば、それでいいと思います。

自分を信じる力をくれる不思議

杉浦 近ごろは人間がだんだん未熟になってきていますね。子どもだけでなく大人も。そういう意味では

な厳しいイメージで見ちゃうし、確かにそういう面もありましたが、決してそれだけじゃないんですね。もつとゆとりがありました。

父が育った家庭というのは両親が円満でなかったようなんです。そういう家庭に育ってしまった自分というのは、どこか歪みがあるんじゃないかと気にしていましたね。家庭に安心感がないと、子どもは本当の意味で豊かに育たないし、自立しないのではないかと。家庭は、外で子どもに何かあつてワッと泣いて帰れる環境じゃないとまずいとそんなことを考えていたようです。父の家は不幸にして、それができない家庭だったらしいので、自分が結婚して子どもを持つたら、そういうことのない家庭にしたいと思つたんでしょね。

それから、学校から子どもが帰った時に、母親がいて「お帰りなさい」と言つてあげることが、母親の大きな仕事だと言つていました。お帰りなさいと全身で受け止めてあげると、そのことが子どもの情緒を育てるということです。私の家は両親が言い合ひをしていることはまれに見たことありますが、お金のことで争うということは皆無だったのです。陰でそういうことがあつたかもしれませんが、子どもの前では、そういう意味でのけんかは、切ありませんでした。

佐々木 ばくも、「お帰りなさい」が大切だと言つてます。「いつてらっしゃい」「お帰りなさい」を言つてあげることをね。フォークシンガーの高石ともやさんの「家族つていいな、待つていてくれる人がいるから」という短い詩があるんですが、家族つてそういうものですね。保育園へ子どもを迎えにいくお母さんも、そういう気持ちで迎えにいつて欲しい。あるいはお勤めから帰ってきたお母さんも同じ気持ちで、「ただいま」と言つて会つてやつて欲しいですね。やつと云えたという気持ちを子どもによく伝えてやつて欲しいと思います。働いて

相田 『いのち』(『しあわせは いつも』所収)という作品で、自分にとって一番大切なものは自分のいのちと言いつつおいて、だから全ての他人のいのちが大切なんだ、と。これは説得力を持った表現でして、若い人がアンケートで、「いのちが大切だから殺してはいけないといわれてもピンとこないが、これを読むと納得した」と書いていましたね。

佐々木 人のいのちを大切にできるのは、大切に育てられた人だけです。殺人者は粗末に育てられた人であることが多いのです。だからいじめっ子は皆粗末な育てられ方をしてるんですよ。自分のいのちを大切にできる人は、殺人などせずに、相手のいのちも大切にできるんです。大事に育てられなかったから、自分を大切にしようなどとはせず、もっと人のいのちも自分のいのちも粗末にしてしまうのです。

私が臨床医学をやりながら若い医師や看護者に必ず言うのは、「自分の家族を大切にしないで、生命医学の研究をしている人なんてにせものだ」ということです。自分の家族を大切にしないで患者さんや患者さんの家族を大切にできるはずはないですよ。時々自分の家族をほっぽりだして、名譽のための研究ばかりする人がいるけど、そういう人はりっぱな臨床医にはならないと思います。

自分のいのちを大切にというのは利己的なことではなく、真の意味は、周囲の皆のいのちを大切にしながらできないということなのです。相田作品は、そういうところまで教えてくれていると思います。

(一九九八年七月二十日、東京銀座・相田みつを美術館にて収録)

こういう成熟した人格の詩と出会って欲しいですね。

佐々木　そうですね。相田みつをさんは皆を信じてくれるわけですよ。自分は信じられていると思える。それが自分を大切に生きようという自信になります。自分を信じて発達への基盤ですし、自分を信じられるように努力する過程が成熟だと思いますから。

相田　父の作品はその時々で自分の気持ちにフィットしたものが必ずあるということ。「感情表現のデパート」だという方がいました。そこが絵とも微妙に違うところじゃないでしょうか。楽しい気分で見たと、落ち込んでいた時では関心を寄せる作品が違ってくるんでしょうね。

杉浦　今回、相田作品を子育てという角度でのぞんでみたわけですが、若い親、幼稚園や保育園の先生などにこの作品にうんと出会って欲しいと思いますね。たしかに肩の力が抜けます。

編集部　誰もが思っていることを書けるのは、やはり距離をおいて遠くから見ているからです。ぴったりくっついていたらダメですね。相田さんの書は非常に主観的でありながら非常に客観的です。

相田　ええ、一つの作品に主観と客観が同時に存在しているというところがありますね。クリスチャンの方が結構おみえになりますが、そういう方たちが「相田みつをさんの本を読んでいたのでは全然わからなかったが、美術館に来て年譜を見たら仏教を勉強された人ということがわかりました」と言われるのです。父の作品がキリスト教的世界とそれほど違和感なく、隣接した部分があるのかなと不思議に感じます。

佐々木　私はキリスト教徒なんです。敬虔けいけんなキリスト教徒の義理の父は『歎異抄たんいしょう』(*)の研究家でもあり、親鸞しんらんもイエス・キリストと同じだとよく言います。禅の勉強してもきつとそういうでしょうね。

◇相田みつを主要著作一覧

*にんげんだもの	1984年	文化出版局
*一生感動一生青春	1990年	文化出版局
*雨の日には……	1993年	文化出版局
*しあわせはいつも	1995年	文化出版局
*おかげさん	1987年	ダイヤモンド社
*いのちいっぱい	1991年	ダイヤモンド社
*あのネ (心の詩 ①)	1995年	ダイヤモンド社
*空を見上げて (" ②)	1995年	ダイヤモンド社
*大事なこと (" ③)	1995年	ダイヤモンド社
*生きていてよかった	1998年	ダイヤモンド社
*いちずに一本道 いちずに一つ事	1992年	佼成出版社
*新版 いちずに一本道 いちずに一つ事	1998年	角川文庫※

(※1992年の佼成出版社版とは内容的に異同がある。)

*こころの暦 にんげんだもの	1991年	而今社
*トイレ用日めくり ひとりしずか	1991年	而今社

◇佐々木正美主要著作一覧

*児童精神科医のノート①②③	1977～79年	たいまつ社
*講座自閉症児の学習指導	1980年	学習研究社
*こどもの成人病 (共著)	1980年	農山漁村文化協会
*障害児と共に生きる社会	1980年	ふきのとう文庫
*児童精神医学の臨床	1986年	ぶどう社
*講座自閉症療育ハンドブック	1993年	学習研究社
*エリクソンとの散歩	1996年	子育て協会
*子どもへのまなざし	1998年	福音館書店

◇相田一人著作一覧

*書 相田みつを	1998年	文化出版局
*父 相田みつを	1998年	文化出版局

◆本文中に出てきた人名・用語名などの解説◆

*相田みつを美術館

所在地 〒104 0061 東京都中央区銀座5-2-11 銀座東芝ビル五階（日2教寄屋橋阪急上）（地下鉄銀座駅・JR有楽町駅下車）休館日 月曜日（但し月曜が祝・祭日の場合は開館）電話 03-3575-0481（十四時時間テレホンガイドは、03-3575-0482）開館時間 午前10時半～午後五時半（最終入館五時）

*フロム

Erich Fromm（一九〇一—一九八〇）アメリカの精神分析学者、社会思想家。ドイツのフランクフルト生まれのユダヤ人。一九四四年アメリカへ亡命。新フロイト派の代表者の一人で、社会的性格論を展開。著作に『自由からの逃走』（一九四一年）邦訳は、一九五一年東京創元社刊、『止むの社会』（一九五五年）邦訳は、一九五八年社会思想社刊 など。

*エリクソン

Erik Erikson（一九〇一—一九九四）アメリカの精神分析学者。ドイツ生まれのデンマーク人。学校教育を嫌い、アイデンティティ（主体性、自己同一性）について考えながら、各地を放浪。フロイトの精神分析の流れをくむ。著作に『アイデンティティ』（一九六八年）邦訳、一九七二年金沢文庫刊、『幼児期と社会』（一九五〇年）邦訳、一九七七年みすず書房刊 など。

*デーケン

Alton Deeken（一九二一—）ドイツ生まれの哲学者。来日し上智大学で講座を持つ。専門は生と死の問題（死生学）で『死の哲学』を講義。著作に『第三の人生』（一九八四年、南窓社）『ユルモアは老いと死の妙薬』（一九九五年、講談社）『死とどう向き

合うか』（一九九六年、NHK出版）など。

*エンデ

Michael Ende（一九二九—一九九五）ドイツ生まれの作家。一九六一年『ジムボタンの機関車大冒険』でドイツ児童文学賞を受賞。『モモ』と『はてしない物語』（一九七〇／七九年）が世界的ベストセラーに。しばしば来日。長野県の黒姫電話館には彼の作品を中心とする展示室がある。

*森田療法

精神科医の森田正馬（もりたままたけ／一九七四—一九八八）が開発した神経症の心理療法。臥居（がじょく）・作業・日記指導などがある。森田は高知県出身で東京慈恵会医科大学教授をつとめた。

*『歎異抄』

仏法の教えを説いた鎌倉時代の書物。親鸞上人の弟子唯円が著者とされる。親鸞逝去後に成立した浄土真宗の聖典。八条の内の一・八条は親鸞の仏教解説。後の八条は親鸞没後の信徒の異議に対する批判を掲載。書き出しの『善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや』のことは有名。岩波文庫などに収録されている。

◇本書の表記について

- （ ）メタ表記については、できる限り原文を尊重しました。
- 語文については、現代仮名遣いにしてあります。
- 相田みつを氏の作品はオリジナルをそのまま掲載しました。
- （ ）常用漢字外の漢字・音訓も用い、難解な漢字には、できるだけ振り仮名をつけました。
- 極端な当て字、代名詞、訓明、接頭語などのうち、原文を損なうおそれのないものは、仮名に改めました。

相田みつを いのちのことば
育てたように子は育つ



1999年2月20日 初版発行
1999年5月1日 第四刷発行

著 者 佐々木 正美
監 修 相田 一人
発 行 者 白井 勝也
企 画 杉浦 正明(子育て協会)
今井 久喜(耕心塾)
装 丁 株式会社エルグ
発 行 所 株式会社小学館

〒101-8001

東京都千代田区一ツ橋2-3-1

電話 編集 03-3230-5823

制作 03-3230-5333

販売 03-3230-5739

印 刷 所 図書印刷株式会社

製 本 所 株式会社若林製本工場

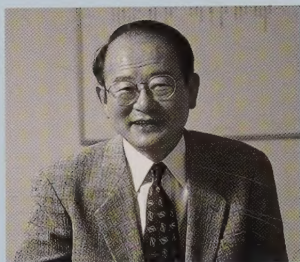
振替口座 00180-1-200

落丁・乱丁本は小社営業部サービスセンター宛に
お送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Mitsuo Aida・Masami Sasaki 1999

Printed in Japan

ISBN4-09-387271-6 C0095

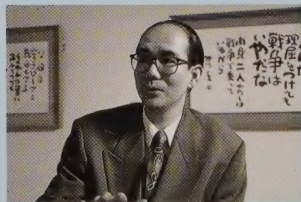


著者紹介

佐々木正美 (ささき まさみ)

精神科医。

1935年生。ブリティッシュ・コロンビア大学児童精神科、国立秩父学園、小児療育相談センター所長歴任。川崎医療福祉大学教授。横浜市総合リハビリテーションセンター参与。アメリカ・ノースカロライナ大学医学部精神科臨床教授。子育て協会顧問。



相田一人 (あいだ かずひと)

相田みつを美術館館長。

昭和30年栃木県足利市生まれ。

相田みつをの長男。出版社を経て(株)而今社(にこんしゃ)を設立。平成8年東京銀座に相田みつを美術館を開館。

『いちずに一本道 いちずに一ツ事』

『雨の日には…』『しあわせはいつも』

『生きていてよかった』などの編集、監修に携わる。

著書に『父 相田みつを』

『書 相田みつを』(各・文化出版局)

P8-BRJ-212

9784093872713

ISBN4-09-387271-6

C0095 ¥1500E

1920095015002

定価： 本体1,500円 + 税

